〈一般の部　優秀賞・福井仁愛学園賞〉

源太みかん

古垣内　求

源太と僕は、小学校から中学校まで、同じクラスだった。
過疎の村の小学校で、クラスは二十名。ほとんどがみかん農家の子供である。
源太は喧嘩が強いばかりでなく、成績もすごく良かった。授業中は腕を組み、じっと先生の顔を見つめている。試験をすると、いつも百点。
中学に入ると、年に一度、受験生三万人の西日本模擬試験がある。源太は三年間、一番の成績だった。僕は一万人の中にも入れなかった。
村の人は彼を神童だと騒ぎ、いずれ東大に合格するだろうと噂しあった。
彼も僕もみかん農家の息子なので、授業が終るとまっすぐ家に帰り、畑を手伝った。
学校ではふざける彼は、いったん畑に出ると、別人のような顔になる。異常なほどみかんに興味を示し、
「僕はこの酢っぱいみかんを改良して、日本一美味しいみかんを作ってみせる。そして、村全体のみかんを最高の味にして、貧しい村の人たちの生活を楽にしてあげたい」
「甘いみかん作りの研究なら、大学で研究者になってからでもいいのでは」
僕は、自分の気持ちを彼に伝えた。
彼は、聞く耳をもたなかった。
誰の忠告も聞き入れず、農業高校に進学した。一日のほとんどを学校の畑で働き、家に帰れば、すぐに裏山にあるみかん畑に直行した。
高校を卒業すると、県庁に就職。農業指導員の資格を取得。みかんの研究を続ける。家に帰れば自宅のみかん畑で、おさらいをする。一年目の冬。
「これから一生、君にみかんを送る」と、一箱のみかんが、僕の下宿に届いた。
ひと口食べたが、酢っぱくて吐き出した。
酢っぱいみかんが、数年間届き続けた。
彼のみかんだけでなく、村全体のみかんが甘くなったと噂が広がる。
ある日、部屋で新聞を読んでいると、彼のみかんが、全国品評会で最優秀賞を獲得したとの記事が目に入った。
『源太みかん』と、名付けられていた。
この記事を読んだ京都の料亭から、大口の注文が入る。全国からの問い合わせが殺到。
村の酢っぱいみかんが、徐々に『源太みかん』に変わっていく。
同級会で久しぶりに彼に再会した。
子供のころの色白の秀才の顔が消え、逞しい百姓の面構えをしている。太い腕、日焼けした顔、作業服姿の彼には、息をのむ迫力が備わっていた。
「君のような秀才には、村始まって以来の東大生になって欲しかったよ」
ついロに出てしまった。

彼は、大きな声で笑った。
「東大がなんだよ。官僚がどうした。こうしてお天道さまの下で働き、最高のみかんを作る。村が徐々に潤っていく。嬉しいね。俺は最高の道を選んだ。いまは幸せのまっ最中や」
もう彼に何も言い返せなかった。
（田舎から大阪に出て、もうすぐ四十年。定年も近づいている。何か残ることをしたのか）
自問自答する。
彼から届くみかん箱に、いつも手紙が入っている。
三十九回目の箱が届いた。いつものように下手な字で宛名を書いて。
『来年は四十回目。それを最後としたい。もう疲れた。思い残すことがない。すべてやり終えた』と。
箱の中のメモに書いていた。
翌年の冬、四十回目が、そろそろ届くころだった。
妻から電話が入った。
「源太さんが亡くなりました」
彼の家に駆けつけた。
奥さんが棺にとりすがっていた。
「みかんを送りに行った帰り道トラックと」
家に帰ると、宅配便が届いていた。やっぱり僕にみかんを送った帰りだった。
箱の中の手紙を取り出した。
『永い間食べてくれてありがとう。褒められてずっと励みになっていた。気力も体力も少し残っている間に終わる。ぜひ一度相談したいことがある』
（何だろう。今まで一度もなかったのに）
もう二度と会うことも、相談されることもない。奥さんに尋ねたが解らない。
僕が解るのは、彼が全精力を注ぎ、自分の道を生きぬいたことだけである。